

神奈川県山梨教会連合会だより

かりん

先生は、昭和21年1月15日、中華民国山東省済南にてお生まれになりました。

敗戦後、横須賀教会先代教会長夫妻であられるご両親と共に、日本に引き揚げてこられ、祖父の教会である大分県の亀川教会から、奇しきご縁により横須賀教会へこられました。

高校卒業後、大手企業、航空自衛隊などに計8年ほど勤められた後、学院へ。昭和48年に教師に補命されました。

現在は、93才になられる母、マサ子先生、奥様の田鶴子先生、長男、雅史先生（国際センタ―職員と兼て）と、横須賀教会にて日々御用をお仕え下されています。

Q…教師になられる前に勤めておられたのですね。

紀義先生（以下、紀）…幼少の頃からの「将来はお道の御用に」という先代の揺るぎない願いがあつて、私も徐々に「やがてはお道の御用に立たせて頂かなくては…」と考えるようになりました。

それについて、お道の御用をさせて頂くのであれば、多少なりとも社会経験を積んだ方がよいのでは…と考えていました。

今思うと甘い考えでしたが、三菱重工に一年、その後、航空自衛隊へ入隊、航空管制官として七年間勤務しました。

就職するまでは、いわゆる教会のお坊ちゃんとして、信者さん達にチャホヤされてきました。世の中に出ると世間の風当りは想像以上に強く、その落差を実感させられる事となりました。でも、そのことが御用を進める上で掛け替えのない収穫となったと思っております。

川でスベって山でコロんで…とってきました

Interview

第35回 横須賀教会 木本紀義先生



Q…補命後は、横須賀教会で御用されながら、連合会などでも御用されていたのですよね。

紀…そうですね。連合会もそうですが、金光教東京出張所、そして東京布教センターで御用させて頂いていました。教務の御用にもお引き回し頂いたことは、大変ありがたいことでした。

日々、教会での御用をさせて頂く中で、私自身大切にさせて頂いていることがあります。私の信心上の師匠は父親なのですが、父はお広前にいる時も、裏（教師家庭）にある時も、

常に変わらぬ姿勢を貫いていたように思いますが。

また、私にとって父は大変厳しく、怖い存在でもありました。子供の頃の思い出に、その厳格で厳しい父が、信心話になると何とも言えない笑みを浮かべ嬉しそうに話を聞いて下さる。その優しい笑顔がみたくて、努めて信心話を心掛けたものです。

父から教わった事で、今でも大切にしていることの一つに、「生きた信心の働きは他を感化して止まないものである。信心が伝わらないのは自らの信心を見直し改むるべき」というものです。

日々の信心実践の中で、信心の継承にも繋がる話なのですが、生きた信心の働きのとは、人を感化せしめる力を持つていくこととあり、家族や子供達をはじめ、関わりある人達に信心が伝わらないというのは、自らの信心が生きた信心とは成り得ていないといえるのではないのでしょうか。

自らが信心を通しておかげを受け、信心を展開していき、関わりある人たちが「素晴らしい生き方をされている」「ああいう風になりたい」「私もあの様に助かっていきたい」と思つて頂けたら、自ずと信心が伝わっていくのではないかと思います。

私は、父のぶれない生き方、お広前にあつても何処にいても、寸分違わぬ姿勢は、生きた信心を実践する上で、欠くことの出来ない姿の現れであつたのではないかと思うのです。私自身は、まだまだ父へは遠くおよばないのですが、大切にしていることなのです。

○ありがとうございました。（今村則子）

5月31日、鶴見教会を会場に第1回教師信徒共励会が開催されました。参加者は12教会から38名でした。

開会のご祈念後、福田光一会長より「三年目を迎える『運動』について改めて理解をして頂きたい」との挨拶があり、続いて東京センター次長荻野理喜之助師を講師に迎え、「『神人あいよかけよの生活運動』の理解と実践を願って」という講題で講話がありました。

お話は運動に関するパンフレットの紹介から始まり、「一人ひとりの生活に神様の喜ばれる信心実践が現されていく」ことが運動の性質であり、運動の「願い」は、この道の助かりへの筋道を端的に表現しているものであり、教祖様が歩まれた信心の軌跡であり、直信・先覚・先師が求め続け深められてきたものである。

また、立教150年のお年柄に教主金光様のご挨拶、「全教の皆様と共に、いよいよ教祖様ご立教のおぼしめしを体



し、世界の平和と人類の助かりの実現にむけて、この運動に取り組み、神人あいよかけよで立ち行く『神人の道』が一人ひとりの生活に現されてまいりますよう、共々に心を込めて、ご神願成就の役割に立たせていただきます」と存じます。

第1回 教師信徒共励会開かれる

報告 横山光雄

を受けて、改めて「運動」の実践にむけて、筋道を理解していただき、願いの唱和、神様のおかげにめざめ、学習をすることの大切さを再確認することになったと、その概要が話されました。

さらには、「お取次を頂いて、おかげを頂いた」ことは大切な信仰体験であり、神様のお働きの実際であり、そのおかげを下さった神様が、私たち人間に何を願われているのかに心を向けていくことが大切である。「願い」に添って、頂いたおかげを整理し、どういっておかげを、どのような信心生活に取り組んだかを確認することにより、「自分が頂いたおかげの話」を「聞いた人がおかげを頂く話」にしていくことが大切であるとの解説がありました。

そして最後に、運動の目的はあくまで、夫々の信心を充実展開していくことであると締めくくられました。

休憩をはさんで、「お礼と喜び」について班別懇談会が行われ、各班とも活発な意見が出され、「生かされて生きていることに御礼を申す」「天地の働きが見えて来ると自ずと御礼が言える」「神様は平等におかげを下さる事への御礼」「御取次を通して気づかせてもらう喜び」

「親が子どもの事を願える喜び」等々、お礼と喜びをどのように受け止めておられるかの懇談が行われました。

閉会挨拶では、高橋正一信徒部長より「今後ともこうした会合を続けて行きたい」との挨拶があり、有意義な中で閉会されました。

かりんの輪 「自由」とは

野毛教会 佐藤 史佳

ある日、めったにかかかってこない教会長先生から電話があり、何の用かと思つたら『『かりん』への原稿の依頼がきた、あなたが書くのが一番良いと思うのでお願いします。』
というご依頼。これも御用なのでお受けし、何について書けばよいですか、とお尋ねすると、なんでも自由に好きなように書いていいよ、とのお答えで、「えっ、自由ですか？：わかりました」と返答しました。返答したもの、心中は正直「げげ、自由？どうしよう：」という気持ちで本当に困ってしまった。何かテーマがあればそれについて考え書けばいいですが、自由と言われてもねえ、さてどうしたものか。まあテーマが自由、というのであれば、その「自由」について書いてみようと思ひます。

改めて自由とは何かと考えてみると、「自由は自由でしよ」としか浮かんできません。自由、という「勝手にきままな」「自分のやりたい様に」という自分の意のままにという意味、そして「ゆるやかな状況」等が、私達が普段持っているイメージではないでしょうか。もちろん、言葉の意味としてそれは正しいイメージで妥当なところでしょう。「自由」という言葉が英語のFREEDOMを日本語訳する際に、それに該当する日本語がなかったため福沢諭吉が作った言葉だ、と知った時は「江戸末期以前の日本には自由もなかったのか、なんてキビシイ」と驚いた覚えがあります。がしかし、自由という言葉がなかっただけで「勝手にきままな」状況や言葉のままに出来なかったわけではなかったで

横浜西教会で「女性のつづき」

7月4日、大雨の予報だったので覚悟はしていたが、出掛ける頃には、ほとんど傘いらずで、申し込みされた全員が揃っての「つづき」となった。12教会から47名が参加し、講師の山田信二先生のお話に耳を傾けた。

教祖様は、男社会の時代に真つ先に女性尊重を身をもってお示しになった。男性の方がそう語られると少々抵抗を覚えたりする。ある集会で、教祖様はよいけれど、奥様はどうだったのだろうかという質問に、それは難儀だったでしょうねと言われて、素直に共感したことがあった。今回、山田先生は、教祖様の女性尊重は、女性だからということではなく、人間としての尊重であったと話され、具体的に、海外で活躍のされている3人の女性の生き様を聞かせていただいた。まずは、ホノルル教会長であった児玉喜久恵先生。先生は、ご主人と共に、移住した日本人を助けるためにハワイに渡られた。そのことだけでもご苦労のほどが偲ばれるのだが、その後の第二次世界大戦で、教会長であるご主人が、敵国人のリーダーとして逮捕されるという最大の苦難に出遭う。その間、喜久恵先生は、6人の子供をかかえ、偏見の渦巻く中で、ひたすら神様におすがりして乗り越えられた。

2人目は、サンフランシスコ教会長のジョアン・トロサ先生。その頃はもう、3世4

世、非日本人対象の布教が始まっていた。先生はアメリカ人で熱心なカトリック信者であった。たまたま大学在学中のレポート作成がきっかけで金光教に出合った。悪魔も地獄もない愛情深い神様に惹かれ、カトリックでは、女性は神父になれないが、金光教では教師にもなれるという男女平等の精神にも感動し、現在もアメリカでお道のためにも先頭に立って活躍されている。

そして3人目は、タイに渡って人身売買を防止する活動をされている如田真理さん。悩み続けていた子孫繁盛家繁盛の教えは、単なる小さな家庭の問題ではなく、人類繁栄のために人を助け喜ばれることと教えられたことが、真理さんをボランティアにかりたてた。そして、今もタイでその活動に身を投じておられる。

ともすると、自分の幸せだけを求めがちであるが、海外に出てまで、人々の救済に命を捧げている人たちの行き方をじっくりと聞かせていただき、自分の生き方を考えた方も多かったようだ。

金光教の教えは、誰が聞いても納得でき、感動を覚え、時には人生をも変えるほどのものを秘めているように思われる。これからも、もつともつと、そんなお話を聞きたいし知りたいたい、しきりに思わされた。

一年に一回ではあるが、顔を合わせ親しく交流できる幸せを感じつつ教会を後にした。

(吉岡裕子)

しよう。決してその概念がなかったわけではないようですが、「自由」という言葉は存在しなかったらしいです。当の福沢諭吉本人は「自由とは『自らをよしとする』という意味だ」ということで自由という日本語になさったようで、そういう意味では「勝手にまなまな」とはかけ離れたイメージです。「自らをよしとする」とは、なんと重い意味の言葉なんだ、と翻訳の意味を知って再び「びつくり」でした。

自由という言葉には「わがまま放題」「やりたい放題」だけでなく、そのような状況を自分に許すには、自らそのことを「よし」とするということ、自己責任がもれなくついてくる。そう言う、では自らにOKを出せば、自己責任をとれば何をやってもよいのではないか、という指摘がきそうですね。「自らをよしとする」の「自ら」には「良心」も含まれているのではないかと思います。つまり「それを『よし』とすることは自分に恥ずかしくないか」ということです。

金光教は比較的教義が自由だと言われています。厳しい戒律をそこから外れないよう守っていくのと自由な教えの下生活していくのとでは、実は自由な教義のほうが数段大変で迷うことが多いのではないのでしょうか。

従って、「自らにそれを『よし』とすることは自分に恥ずかしくないか」とは、神様の分霊(わけみたま)である自分に恥ずかしくないことか、ということとは神様に対して恥ずかしくないことか？ということかも知れません。

流れていく日常の生活では、常にそんなことを考えているヒマはなかなかありませんが、たまには立ち止まり考えられる余裕を持ち、「自由」な自分でいたいものだな、と思います。

イチゴ狩のついで

4 月 12 日 (土)、爽やかな春の日差しの下「イチゴ狩りのついで」を開催させていただきました。参加者は、8 教会 63 名 (大人 38、小人 25) でした。

横浜市営地下鉄下飯田駅に集合した参加者は、所々つくしが顔を出す道を歩いて農園に到着。農園は立ったままイチゴが摘めるようになっていて、参加者は、一般のイチゴ狩り客に混じって、おいしそうに実った赤い実を摘んでは口に運んでいました。

30 分の制限時間を終えて満足気にハウスから出てきた参加者は、近くの町内会館に場所を移し昼食 (まだ食べるか)。その後はゲームや読み聞かせで腹ごなし。



その中の「ペコちゃんゲーム」では、誰か分からないペコちゃん役の人が、舌をペロツと出したのを見たら倒れてしまう：というルールに、下ばかり見る人や足早に動き回る人など、ドキドキのゲームをみんな楽しんでみました。
(村田光治)

「つづきの命」が開かれました

6 月 12 日 (木) 神奈川教会において、午後 1 時 30 分より開催されました。

前回、心の病について研修したいという意見が出ましたので、今回は DVD『統合失調症と家族』を見て勉強会を開きました。

統合失調症は親の育て方が原因ではない、糖尿病や高血圧と同様よくある病気で、治らない病気ではない。ただ回復するまでに、一定の時間がかかる病であるということを知り、その時間を短くするために、どう家族が患者と接すればよいかを学びました。

金光教の教えを通して、家族をどう支えていけば良いか意見交換が行われ、有意義な時間を過ごすことが出来ました。
(南 恵子)

☆教師信徒共励会 2 について

5 月に開催しました「教師信徒共励会」を受けて、今回は山梨県での開催となります。

○8 月 30 日 (土) 11:00~15:00

○会場 金光教甲府教会

○内容 講話と班別懇談

○講師 南清孝師 (連合会副会長)

*参加費無料

*昼食はこちらで用意しております。

*詳しくは各教会に配布してありますチラシをご覧ください。

「おかげのちり」

鎌倉教会 伊藤かおる

二十余年、定期的に血液検査を受ける日々を送っています。私達以前の世代に多い肝炎治療を受けるため数人の医師との出会いがありました。夫の転勤をきっかけに関東エリアの病院で信頼できる医師を求めて数年さまよい、最終的に落ち着いたのが、今の医師です。この出会いこそ、神様のなされた事と思わせて頂いています。

そのおかげのもとになっているのは、鎌倉の仮住まいからも近く、祖父の代から信徒として頑張っている母の元で育ったこともあり、教会に足を向けたことが始まりでした。

教会近くの地域で評判の診療所に風邪で診察を受けたところ、月に一度、肝臓専門の医師が来て下さるとのこと、診察を受けたのがきっかけでした。検査結果の報告も、歩いて三分で教会にお届けでき、今までにない安心の中での病気との付き合いになつていきます。今の先生になつてからは、不思議なほど検査結果も安定して、近々に始まる最新治療も不安なく受けられるのは、信頼できる医師との出会いがあればこそのことです。

おかげという言葉をずいぶん耳にしますが、知らず知らずを受けているのがおかげで、それに気付いてこそ本物の信心であると教会長先生に言われました。

金光教神奈川山梨教会連合会

発行者 福田 光 一

〒 221-0057 横浜市神奈川区青木町六一二十五 金光教神奈川教会内